

氏 名 小 林 博 行

学位（専攻分野） 博士(学術)

学 位 記 番 号 総研大甲第224号

学位授与の日付 平成8年9月30日

学位授与の要件 文化科学研究科 国際日本研究専攻

学位規則第4条第1項該当

学 位 論 文 題 目 食の思想・安藤昌益

論 文 審 査 委 員 主 査 教 授 笠谷 和比古  
教 授 山田 慶兒  
助 教 授 栗山 茂久  
名 誉 教 尾籐 正英（東京大学）  
助 教 授 横山 俊夫（京都大学）

## 論文内容の要旨

この論文は、安藤昌益についてのたがいに関連する四本の文章から構成される。

I 「食と時間」は、昌益が著作でときおりみせる妙なこだわりを、食の思想というかたちで構成し、そのひろがりと深さを測定するものである。昌益は食や米穀を重視する。だがそれは、耕作する農民や田畑と直接むすびついた食ではない。食は独特の時間感覚とむすびについて、思想的な深みをあたえられている。昌益は食をモデルとして、ひとの生殖と発生について分析し、人倫や社会の問題に切りこもうとしている。生殖や発生については食の思想が貫徹しているとみなすことができる。けれども人倫や社会については、食の観点からみた親子は、実際に生んでそだてる親子とはべつである。後者の人倫親子は、食の思想のとどかない部分として残される。なお、食とむすびつく時間感覚について、昌益の類例と目しうる見解を儒者と医師からひとりずつあげて検討した。

II 「回転運動の世界へ」は、昌益が著書のタイトル『自然真営道』について与えている説明を手がかりに、食の思想がどのような構図で表現されたか、またそこにおける昌益の意図は何だったかを明らかにした。構図とは要するに五行説であり、昌益の意図は、この世界の多様な万物を、回転する五行の構図のなかに秩序づけることであった。多様な万物がどう秩序づけられたかの一例として、昌益の動物分類を概観し、食の思想に通ずるその特質を指摘した。また回転については日本における地球説の受容を、五行説については昌益没後の五行説の変容を、それぞれ参照した。

III 「胃・生命・平等」では、昌益における医学と平等という問題をかかげ、つぎの順序で考察をすすめた。まず時代背景として、昌益が生まれた元禄ごろに医学が日本にひろく浸透していくときの一局面を、消化説の成立を通じてながめた。つぎにこれまでのべてきた食の思想が、中国医学における生命の問題をどう処理したかをのべた。昌益は生命の問題について時期によって見解を異にしているので、ここで昌益の初期と晩期の問題を生命の問題と平行して論じた。最後に晩期昌益にみられる二種類の医学を検討することで、昌益の平等が初期のそれから変貌して、明確な構図のない抽象的なものになっていることを明らかにした。

IV 「ふたつの火」は、昌益のイデオロギー批判と食の思想とのかかわりを、医学における君火・相火に着目して検討した。まず中国および江戸時代日本における君相二火の解釈

史をたどり、昌益が誰のどんな説を批判しているのかを明らかにした。つぎに明末のある解釈が江戸時代日本に受容され、さらに解釈がくわえられてゆく過程のなかで、昌益がそこに見いだしたであろう問題を指摘した。最後に、食の思想との関連から、昌益が君相二火のイデオロギーを批判するにいたったきっかけについて、ひとつの示唆を提出した。

先行研究との関連でいえば、この論文は、いままでの研究が見落としがちであった細部にあえて注目し、新たな昌益像を描いたものである。それによって、従来の昌益研究にみられる晩期偏重に対して、初期のほうを積極的に評価する観点を示した。また最近の昌益研究に顕著な派閥主義に対しては、いずれにもとらわれない第三の立場をとることができた。個々の章における問題についてつけくわえれば、Iでは昌益を性の、あるいは陰陽の思想とみる誤解をただし、IIではいままで難解とされてきた昌益のタイトル説明に、はじめて詳細な分析をくわえた。IIIでは昌益の思想の変化の問題について、用語の解釈に終始していたこれまでの水準をこえて、それを医学のある特定の問題と対照してみることで、ひろい文脈を明らかにした。IVではイデオロギー批判について、昌益の思想を儒家や道家の伝統と関連させたり、あるいは徂徠学が逆説的に昌益をみちびきだしたという従来の見解とべつに、医学の特定の問題に限定することで、イデオロギー批判へのより具体的な道筋を提示した。

新たな昌益像の提示とともに、昌益と彼の時代との関連について、いくつかの論点を提示することになった。Iでのべた今と古についての儒者と医師の見解や、IIでのべた地球説が日本にもたらした認識論的問題、またIIIにおける江戸時代の医学における消化説、そしてIVにおいては君相二火の解釈そのものがそれである。いままでの昌益研究においても、また江戸時代の思想史・医学史においても、これらはほとんど顧みられることのなかった論点である。このことが意味するのは、昌益を視点とすることで、はじめて見えてくる同時代の状況があるということである。こうしたことをふまえて、「おわりに」では、視点としての安藤昌益という、従来の研究が欠いていた観点を提起した。

一般論をできるだけ避け、個々の問題に即して昌益を論じたこの論文によって、昌益が具体的な物事をどう観察し、どう思索したか、その一面が明らかになった。安藤昌益はたしかに読みつがれるべき思想家である。しかしそれがもっとも有効に読まれるのは、そこに何か特別なものを期待するときではない。昌益から物事を見てみるからこそ、昌益をいまに甦らせる唯一の方法である。これがこの四本の文章をつらぬく基本的な姿勢である。

## (論文審査結果)

本論文は、徳川時代における社会批判、政治イデオロギー批判を展開した特異な思想家である安藤昌益を対象として、その思想の核心を「食の思想」という観点において分析した研究である。従来の安藤昌益に関する研究では、もっぱら昌益の身分制社会批判に関する論述の箇所拘泥して行われる傾向が強かったが、本論文はむしろ昌益の自然観と人間存在を根拠づける形而上学に着目し、他方では昌益の医師としての立場に鑑みて、その思想を中国および日本の医学思想の流れの中において捉えることによって、昌益の思想の全体像を明らかにするとともに、併せて昌益の社会批判の立脚点をその中に定位しようと試みたものである。

本論文では昌益の思想体系を「食の思想」という観点において把握をする。すなわち昌益の思想において、人間の存在は米穀およびその不断の摂取において基礎づけられる。人間の性セックスを規定している夫婦の精水は米穀の精潤であり、胎児は母胎をとおして米穀の栄養を補給され、誕生した人間は米穀を食物として日々摂取することによって、日々に新たな人間として存在しつづけるとする。

本論文においては、この「食の思想」はこれまた独特の昌益の時間観念を基礎づけるものとして理解できるとする。すなわち昌益は時間の流れの中に発展や変化、あるいは始源といった特異な時点を認めない。世界は無始無終であり、日々に新たな一日が更新されつづけていくのみである。この昌益の時間観念は、「食の思想」における人間存在の日々の更新という観念に相即するものであり、その意味において「食の思想」が昌益の思想体系の基軸的な意義をになうものであることが説かれる。

さらに言うならば、世界は無始無終でありそこに特権的な始源を認めないという言明は、身分制社会批判としての聖人批判論を導き出していく。何とならば人の世の始源において聖人なるものが出現し、人々に生活の方法を教え、社会に礼楽刑政の諸制度を設けることによって社会の秩序は安定し、聖人の末裔が社会を統治するものとして君臨するとするのが儒学思想であるが、昌益の時間論はこの地平において、儒学思想とそれに裏付けられた身分制社会のあり方を痛撃する役割を果しているのである。この観点からしても昌益における「食の思想」の広がりや深さというものを認識するとともに、それが昌益の思想体系の根幹をなすものとして了解されうると、本論文は指摘をする。

本論文は更に「食の思想」を伝統的な五行説の世界に位置づけて、その思考法的な根拠

を明らかにするとともに、昌益の医学において「食の思想」の展開を跡づけていく。そこではさらに中国および日本の伝統医学の流れ、ことに当時の日本における脾胃論の発達と関連づけて分析することによって、昌益の「食の思想」がけっして孤立した性格のものではなかった所以を明らかにする。本論文のこの箇所は、当時の医学が逢着していた脾胃中心の新しい生命観や、病気における個人差の取り扱い方、環境の影響、そしてまた君火・相火の二火論といった諸多の重要問題を順次検討の対象にして、「食の思想」の文脈の中でそれら相互の意義を解明していくのであるが、そもそもこの分野は従来の医学史研究においても空白に属するところであり、今回の本論文は昌益研究を通してこの未開拓の部分に確かな道筋をつけたという点において、その意義を少なしとしない。

以上のごとく、本論文は安藤昌益の思想を「食の思想」として位置づけることによって、昌益研究に新生面を切り開くものであるとともに、他方では昌益研究を通して、当時の日本社会に存在した諸々の思想や医学理論の意義解明を前進させたものでもある。

もとより本論文には欠点も指摘しうるであろう。複雑にして多様な言葉遣いを駆使して叙述する昌益の思想を一面的に捉えすぎていないか、あるいは論文各章の有機的な連関に弱点を残してはいないか、昌益の前期と後期についてもう一步踏み込んだ対比分析が必要ではないのか、などである。

こうした問題を残すものではあるが、本論文は全体として斬新にして洞察力、構想力に富むものであり、昌益研究に対しても、また徳川時代の思想および医学理論の研究に対しても重要な視座を提示したものとしてこれを評価し、本論文に対して学位を授与するのが妥当であると結論づけるものである。